

若手建築家による展示コラム

竹製スタンドランプ

久保 秀朗

この竹製スタンドランプは高さ178センチと男性の背丈ほどもある大型の照明器具です。天井に光を広げる形としての円錐と、自重を床にバランスよく自立させる形としての円錐という二つの円錐を組み合わせた、合理的で機能美ともいえる単純な形をしています。しかしながら暗闇の中でランプを点灯すると、その力強い外観からは想像もつかない繊細で美しい光が天井に向けて広がる様に驚くことになるでしょう。

円錐形のシェードをよく見てみると、竹の幅を2ミリ、4ミリ、13ミリと3段階にも幅と密度を変えて編み込まれており、それにより電球という点光源から光が広がる現象を繊細な光の表情としてデザインされているのです。

タウトは、ライプツィヒ建築展鉄鋼館とドイツ工作連盟ケルン博覧会グラスハウスという2つのパビリオン建築で世界的に知られる建築家となりました。タウトは「建築はつり合いの芸術」と考えていました。つり合いとはつまり面や線の分割のことで、近代建築の傑作として名高いその2つのパビリオンはそれぞれ、近代工業によって供給が可能になったスチール、ガラスを使い立面や屋根が美しく分割された「つり合いの芸術」としての建築でした。

この竹製スタンドランプは、建築ではなく工芸品ではありますが、その「つり合いの芸術」という思想が純粋なかたちで具現化した作品です。日本滞在中に建築のデザインを成し遂げられなかったタウトですが、この作品は建築家としての思想が強く込められた、まさに竹を使った建築ともいえる傑作ではないでしょうか。

